

新発見！ 大宰府を守る土塁

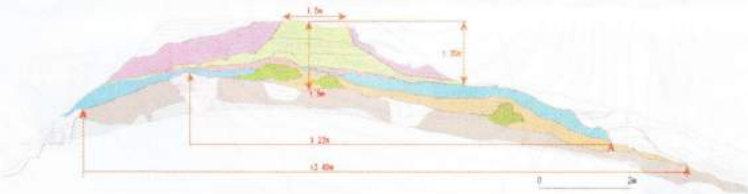


前畑遺跡第13次発掘調査現地説明会 平成28年12月3日（土曜日）・4日（日曜日）

筑紫野市の前畑遺跡で、7世紀につくられた長さ約500メートルの土塁が、発見されました。これまでの調査で、土塁は粘土や砂など種類の違う土を積み重ねた「版築」（はんちく）という造り方でできていることが分かりました。このような造り方は、水城跡（みずきあと）や大野城跡（おおのじょうあと）など、今から1350年前の7世紀後半に相次いで造られた古代の遺跡に共通しています。



土塁全景写真（北から）



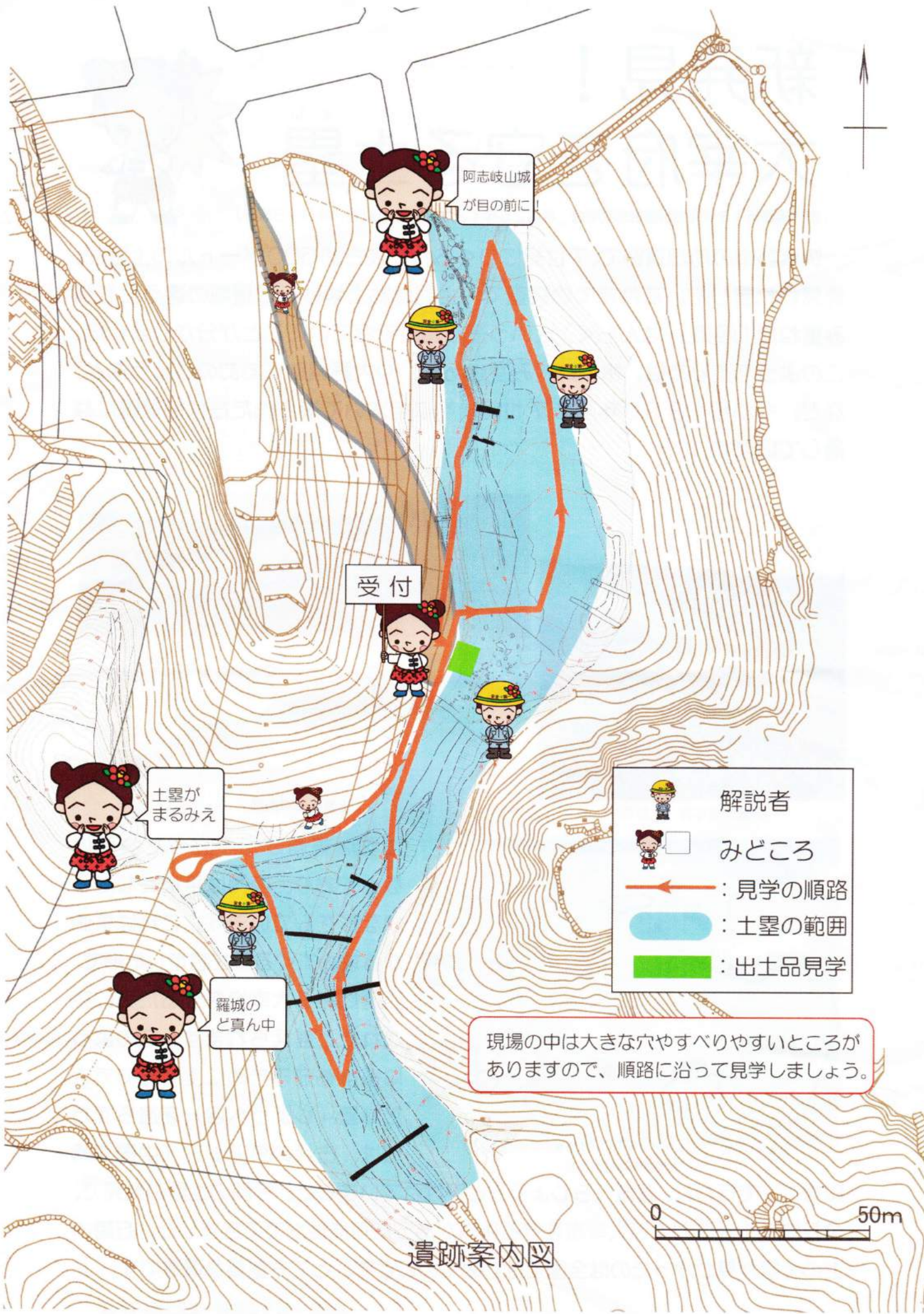
土塁土層断面図



大宰府羅城推定図

土塁は東側が切り立った斜面になっており、西側は平たくなだらかな形をしています。これは東側から攻めてくる敵を想定した形で、西側にある大宰府を守るために築かれたと考えられます。このように都市を守るために土や石でできた城壁（じょうへき）を巡らす方法は、古代の東アジア（中国や韓国など）で行われ、羅城（らじょう）と呼ばれていました。今回の土塁の発見で、全長約5.1kmにおよぶ大宰府を守る羅城があった可能性がでてきました。丘陵の上の土塁が見つかったのは全国ではじめてのことで、とても重要な遺跡です。

今回の土塁の発見で、全長約5.1kmにおよぶ大宰府を守る羅城があった可能性がでてきました。丘陵の上の土塁が見つかったのは全国ではじめてのことで、とても重要な遺跡です。








阿志岐山城
が目の前に

受付

土壘が
まるみえ

羅城の
ど真ん中

-  解説者
-  みどころ
-  : 見学の順路
-  : 土壘の範囲
-  : 出土品見学

現場の中は大きな穴やすべりやすいところがありますので、順路に沿って見学しましょう。



遺跡案内図

新発見 大宰府を守る土塁

前畑遺跡第 1 3 次発掘調査 現地説明会

筑紫野市教育委員会 文化情報発信課

1. 発見された土塁（どるい）

筑紫駅西口土地区画整理事業に伴い実施している前畑遺跡の発掘調査では、弥生時代前期～中期の集落、古墳時代後期の集落と古墳、窯跡、中世の館跡、近世墓地などが発見され、長期間にわたって人々の営みの痕跡が発見されています。

今回の丘陵部での調査では、7 世紀に造られたと考えられる長さ 500 メートル規模の土塁が、尾根線上で発見されました。

2. 土塁の構造

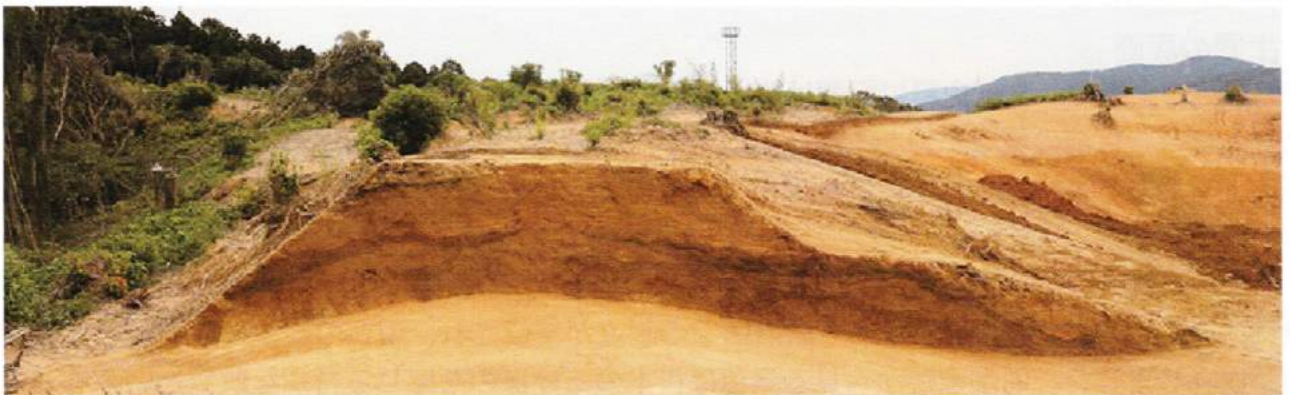
土塁は大きく上下 2 層から成り、上層の外に土壌を被せた構造です。上層は種類の異なる土を層状に積み重ねた「版築」（はんちく）と呼ばれる工法で造られています。このような工法は特別史跡の水城跡（みずきあと）や大野城跡（おおのじょうあと）の土塁の土壌にも類似しており、7 世紀後半に相次いで築造された古代遺跡に共通した要素と言えます。

ただ、すでに知られている水城や小水城、とうれぎ土塁、関屋（せきや）土塁といった 7 世紀の土塁は、丘陵と丘陵の間の谷を繋ぎ、敵の侵入を遮断する目的で作られた城壁としての機能が想定されています。

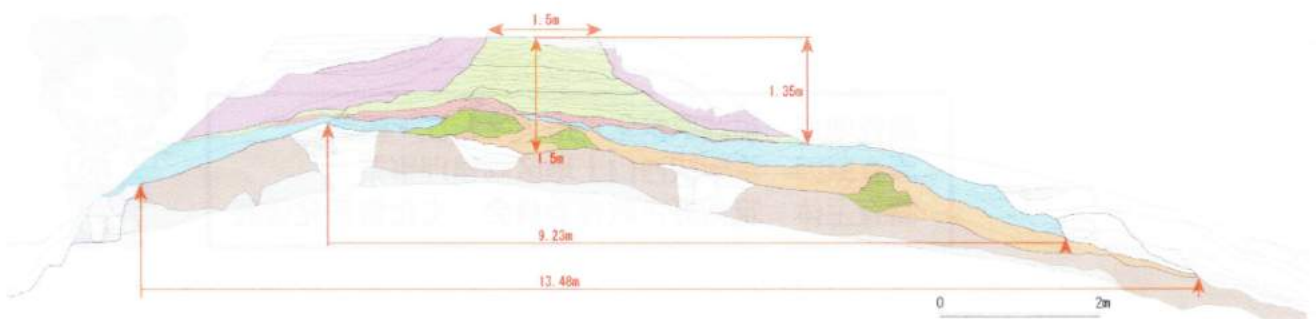
今回、前畑遺跡で発見された土塁は、宝満川から特別史跡基肄城跡（きいじょうあと）に至るライン上に構築されたもので、丘陵尾根上に長く緩やかに構築された、中国の万里の長城のような土塁となっています。

また、土塁の東側は切り立った斜面になっており、西側はテラス状の平坦面を形成しています。これは東側から攻めてくる敵を想定した構造で、守るべき場所、つまり大宰府を防御する意図を持って築かれたと考えられます。

(東)



(西)



3. 前畑遺跡で発見された土塁の歴史的な背景

このように都市を防御するために城壁（土塁や石塁）を巡らす方法は、古代の東アジアで中国を中心として発達し、羅城（らじょう）と呼ばれていました。

日本に最も近い羅城の類例は、韓国で発見された古代百済の首都・泗泚（サジ）を守る扶余羅城（フヨナソン、全長 8.4Km）があります。扶余羅城は、北と東の谷や丘陵上に土塁を構築し、西を流れる錦江（白馬江）を取り込んで羅城としています。自然の濠ともいふべき、河川をうまく利用して羅城を築いていることになります。

日本書紀によれば、660年に滅んだ百済の遺臣達によって、この筑紫の地に664年に水城、665年には大野城と基肄城が築造されており、脊振山系や宝満山系などの山並みの自然地形を取り込んだ形で大宰府にも羅城があったのではと長く議論されてきました。前畑遺跡の土塁は丘陵尾根上で発見され、丘陵沿いに北へ下ると宝満川へ至ります。このことから、当初の大宰府の外郭線は、宝満川を取り込んでいた可能性も想定され、古代の東アジア最大となる全長約 51Km におよぶ大宰府羅城が存在した可能性がにわかに高まってきました。

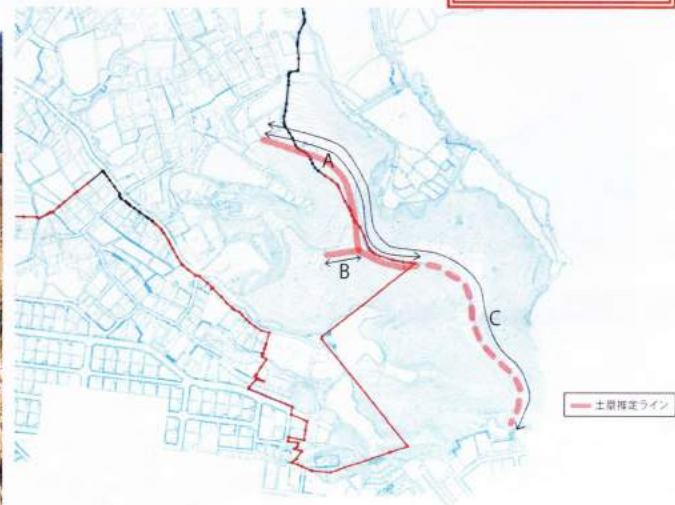


扶余羅城図

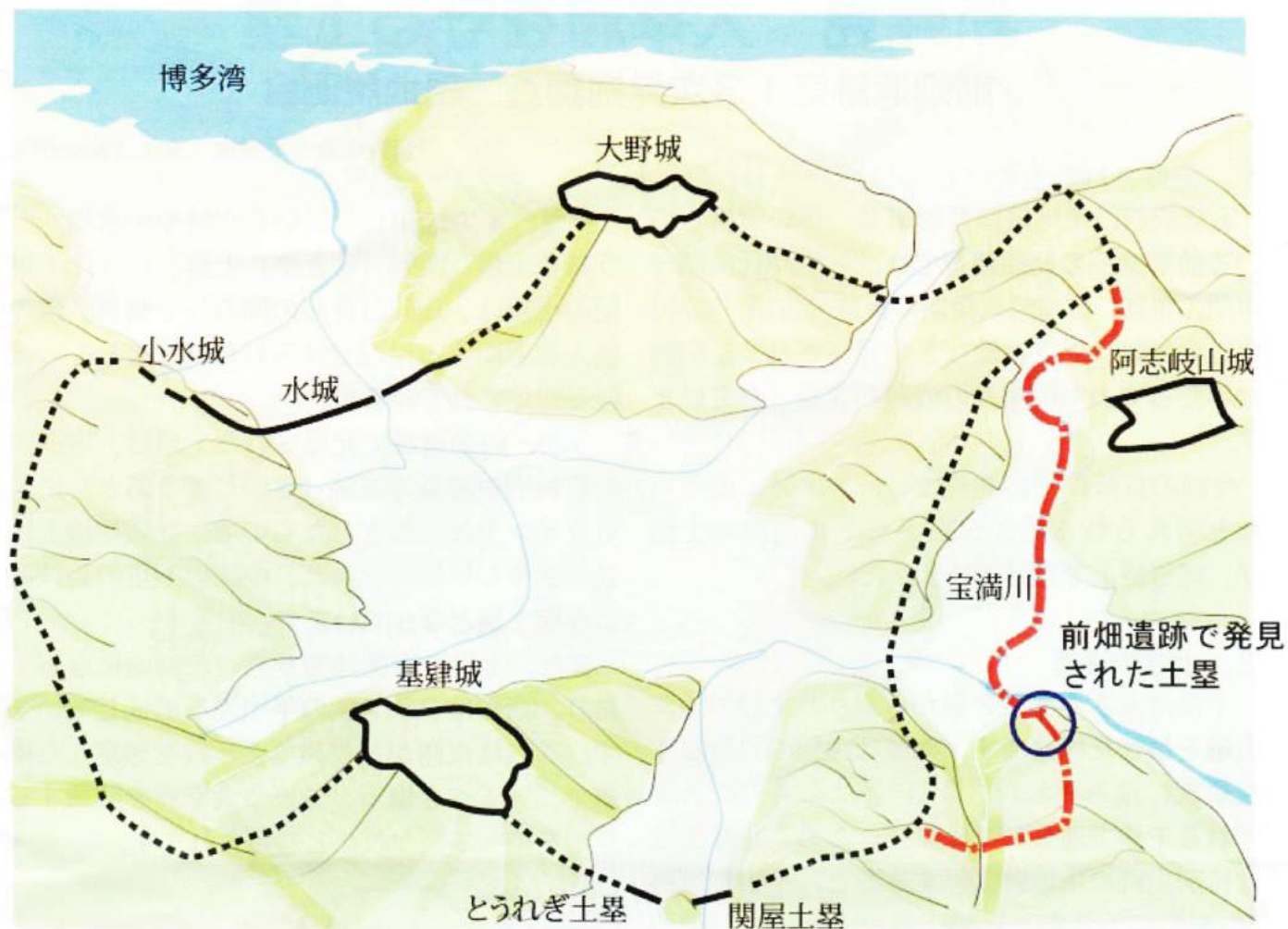
土塁の長さ
 A：約 250 m
 B：約 22 m
 C：約 500 m



土塁全景（北から）



土塁推定ライン（上が北東）



大宰府羅城推定図

黒線…阿部義平氏による土塁推定線
赤線…前畑遺跡土塁から推定した外郭線

4. 土塁の評価

前畑遺跡の土塁は、文献史料に記載はないものの、古代大宰府を防衛する意図を持ったものであると考えられ、百済の城域思想を系譜にもつ大宰府都城（とじょう）の外郭線（がいかくせん）に関わる土塁であると推測され、東アジア古代史上において大きな意味をもち、わが国において類をみない稀有な遺跡です。

このような巨大な都市が建設されるのを契機に、「日本」の国号や「天皇」といった用語が史料に現れ、「律令（りつりょう）」という法治国家の制度が整備され、現在の日本の原形としての古代国家が成立しました。前畑遺跡から見る景色は日本のあけぼのを感じる特別な眺望といえるのではないのでしょうか。

調査地点	福岡県筑紫野市大字若江・筑紫
調査原因	筑紫駅西口土地区画整理事業
調査主体	筑紫野市教育委員会 文化情報発信課





前畑遺跡第13次発掘調査 土塁範囲図